

そのつきそいを残して、難民全員二千数百人の老弱男女が長蛇の列で九月十二日間島市を後にした。約百二十キロの路を十二日間かかり、野宿に野宿をかさね、食料はつきる、老幼婦女子の歩行困難など、あらゆる辛苦障害を克服して、九月二十三日琿春街に着き、旧警察官舎、および東満ホテルに收容された。ただし、健康体の者は、家族とも英安成鉉に行くよう指令があり、私も入坑日を待つ。入坑当日、母が持病の腹痛をおこし、入坑をこたわり、收容所でソ連の使役、原住民の手伝い等で日を送った。九月も末頃になると、寒さもいっそう加わり、食糧不足に栄養失調、それに、発疹チフス、回帰熱等の伝染病の流行で、犠牲者のほとんどはその病気で死亡した。この時期に一日数人は死んでいった。私どもも病まなかったわけではない。今日か明日かと死の日を待ったことであった。さいわいと生き残った私一家も、全員引揚げたわけではなく、母、長女、長男、と三人を琿春の土にしてきた。昭和二十一年八月三十日、とつじょと内地移送の命令が出て、九月一日に琿春出

朝日開拓団の末路

岐阜県 下島 寅三

昭和十五年四月、朝日開拓村計画に基き、団長鈴木亨氏に率いられ、入植、以来昭和二十年五月までに五か年二百戸計画の七〇%にあたる百三十八戸、六百人が入植し、団の建設も順調に進み、その完成も間近になっていた。

昭和二十年八月九日未明、ソ連の参戦で、琿春県長より緊急避難命令、「老幼婦女子は当日正午までに琿春街へ即刻避難せよ」その送り出しに大わらわとなる。近況状況からして覚悟はしていたものの、来たるべき到来により、団内は恐怖と不安で騒然となり、絶望感にとらわれた。

警備指導員の指示に従い、団員及び青年団員は団の警備と軍への支援のため、残留し、老幼婦女子は団長引率のもとに午前十時を期して出発、延々長蛇の列をして琿

春街へ向かった。途中、琿春橋の直前まで来たとき、敵の追撃阻止のために強行した友軍の橋梁爆破によって渡橋不可能となり、急ぎよ渡船場まで引き返し、渡船利用のやむなきにいたったが、渡船場へきてみると周辺の開拓団からの避難者が殺到し、大混乱を呈していた。その上、前日来の豪雨で増水した川は渡船の往來を一段と困難にし、渡河中に当団団長からも犠牲者が出て、心痛の上もない状態となった。

ようやく琿春街へ到着したときは「正午まで」の集結時間をはるかに遅れ、指定された集結場所とはとっぷりと夕闇につつまっていて人影もなかった。

唯一の頼りである関東軍本部へ助けを求めると、あれほど精銳を誇っていた関東軍兵舎はすべてモヌケのカラーで、軍病院の一隅には、傷病兵だけが置き去りにされていた。

またその関東軍に見捨てられたのはその傷病兵ばかりではなく、国境地帯に入植していたわれわれ開拓団も同様で、軍幹部はソ連軍の侵攻直前に身の安全をはかり、極秘のうちに家族とも安全地域へ退避していたのであ

る。

唯一守護神として信じきっていた関東軍の裏切りを知った当初は、ただただ啞然とするばかりだった。

老幼婦女子を引き連れたわれわれは五里霧中のなかで退路を求め、翌十日昼、間島市（現、延吉市）まで逃れ、間島在滿国民学校へ退避、食糧および被服等が支給され、つかの間の安どをみた。

一方、開拓団に在留していた団員は、友軍の交替で団地放棄のやむなきにいたり、十一日深夜、北鮮慶源をへて、三日間島市へたどり着き、家族と合流。

敗戦を知ったのは十七日であった、一か月にわたる間島在滿国民学校での避難生活の後、ソ連軍から原住地復帰命令があり、琿春へ帰還することになった、歩行困難な病弱者とそのつき添い二、三人を残し、九月十日出発した、道中は幼子を背負ったり、手をひいたりして、十二日間の野宿を重ね、かんなん辛苦の末、琿春街へたどり着いたが、開拓地のわが家へは戻れず、日本難民として収容されることになった。

以後、ソ連軍の使役や、英安炭鉱作業等、耐え難き重

労働を課せられ、団員は過労と栄養不良、その上悪性伝染病に見舞われ、つぎつぎとたおれてゆき、犠牲者は激増した。

そうしたなか十一月二四日、頼りの鈴木団長も倒れ、田中副団長をも失い、支柱を失った団員の悲嘆と絶望は極に達し、生きる気力もなかった。

十二月にはいると、回帰熱、発疹チフスが収容所内にまん延し、その猛威は難民全員を罹病させ、犠牲者は連日続出し、正に生き地獄と化した収容所内の惨憺たる状況はどうてい筆舌であらわすことはできない。

当団では六百六十人余の団員中、犠牲者はその半数に近い三百十九人となり、無念のうちに、尊い拓友の命が奪われていったのである。

二十一年八月三十日、待望の日本遺送命令が突然発せられ、中国人の手に渡されていた子どもや、生命を救うため、やむなく中国人のもとへ身を寄せていた女性たちなど五十人あまりを残し、九月一日、日本遺送の真意も半信半疑のまま琿春在満国民学校に集結し、午前十一時徒歩で日本への道へ踏みだしたものの、圖們まで三日三

晩にわたる不眠不休の行軍は、途中から豪雨に見舞われ、ぬかるむ道を水泡に痛む足を引きずりながら半死半生で歩き続け、三日正午ようやく圖們駅へたどり着いた。圖們からは貨物用貨車に乗せられ、新站までくると、そこは国府軍と中共軍の非武装地帯になっていて汽車での通過はできず、新站から老爺嶺まで約十五キロの峠道を徒歩で登り、再び貨車に乗せられ、九月八日吉林収容所へ到着、以後長春、錦州など各地の収容所を経て、われわれの所属する東北第六七大隊と第六八大隊は十月十一日と十二日にコロ島へ出て、十月二日博多港へ上陸、万感胸に迫る思いで故国の土を踏んだのである。

そして十月二四日、鈴木団長以下三百十九人におよぶ犠牲者の名簿をたずさえ、悲惨な姿で母村である朝日村へ帰村し、満身創いの思いで悲痛の報告を終えたのである。

この満州引揚げまでのてん末については、その間の苦難に大同小異はあっても、二十七万人の全満開拓民にとっては共通の悲惨事であり、その苦勞の全容を筆舌につくすには余りにも悲惨な事実の連続で、表現の言葉も

見当たらぬ。

第九次東三河郷開拓団の末路

愛知県 夏目安男

昭和十五年九月私が十歳の時、愛知県南設楽郡より父に連れられて母と妹家族四人で渡満しました。龍江省甘南県太平山村三合屯第九次東三河開拓団です。

そこは広く淋しい荒野で、シベリアおろしの冷たい風が枯れ草をなびかせていました。

はるか遠くには、開拓団の部落が点在して見えた。日本で思っていたような花咲く楽土の広野でなく、ところどころには水がたまった沼があり、遠い道を馬車の後について何時間も歩いて夕日の沈む頃に、土盛の塀に囲まれた部落につきました。

そこには、粗末な服装をした原住民の人達がいた。家は草屋根の泥壁で部屋の中は日本の古新聞を壁と天井に貼ってあった。

さて、私たちの同志が満州国開拓団として極寒地に農業開拓の鍬を打ち振るって活動し、ようやく開拓も順調に進み始め、大地に根づいた生活の第一歩を踏み出し、これから飛躍できて、一年とみのりある生活が保証され、一家団らんが現実のものとなりつつあるとき、日本は一敗地にまみれ、世界の国々に対して無条件降伏という世にも無念な敗戦を味あわねばならなかったのです。敗戦後の満州の地で、私たち開拓団の家族の悲惨さはこの世の地獄絵図さながらで、目をおおうばかりでありました。

終戦直前まで、男という男はほとんど軍人として召集され、残された者は、老人と幼児子どもを抱えた婦人ばかりでした。侵略国の日本人集団としてわれわれは残された。

銃器が手元にある間はまだ土匪賊の襲撃はありませんでしたが、中国公安隊自治委員会等によって銃器を没収された後は、朝に夕べに夜には土匪、匪賊の跳りようまかせ、なんの策もないありさまで、そのうえソ連兵の侵入と、ともに平和であった日本居住地は無頼の広野と化